

観光研究・景観研究に必須の

重要資料を復刻！

風景協会 発行

(一九三四年～一九四三年)

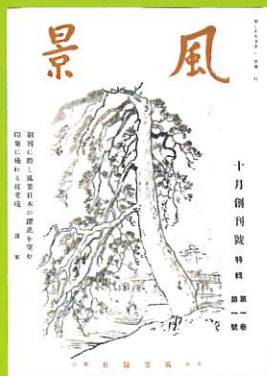
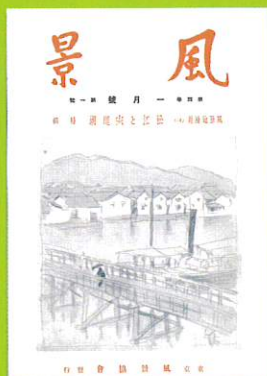
一九三四（昭和九）年、風景協会が設立され、機関誌『風景』を創刊した。

本復刻版は、創刊号から戦況悪化による休刊直前の第一〇巻第一二号（一九四三年一二月）までを収録する。

風景協会の設立趣意書には「科学と芸術との二大分野に跨りて、恰く知識を糾合し、風景の総合的研究調査を行」い、そして「国土の風光に憧れて、来遊する外客に対しては、よくその恵沢を頒ち、以つて国際親善に資せしむる」とあるように、「風景」を軸に観光・文学・芸術・造園・地質・地理等、多彩な記事が収録されている。また時局の影響から「旧外地」「満洲国」・中国等の記事も頻繁に登場する。

復刻版

風景



全12巻・別冊1

価格 本体288,000円+税(全4回配本)

推薦 荒山正彦(関西学院大学教授)

推薦文

「風景」に込められた意味と価値の記録

関西学院大学教授 荒山正彦

風景協会による雑誌『風景』をはじめて手にしたのは、今からおよそ三〇年前の大学院生の頃であった。創刊号に掲載された林学者・本多静六による「日本は世界に冠たる風景国である」という自負心に満ちた一文は、「風景のナシヨナリズム」を感じずにはいられない印象的なものであった。

雑誌『風景』が創刊された昭和九年は、日本初の国立公園が誕生し、また大正期からブームとなった旅行や登山がさらに広がった時代であった。風景協会の活動趣旨には、日本の風景を保存すると同時に、開発・利用の方法を探り「国民の心身休養と国運発展に資する」ことが記されており、その活動には、昭和二〇年の第一回「大島」をはじめとする「観勝旅行会」の主催などがあった。『風景』の巻頭には毎号さまざまな場所の「風景写真」が掲載され、広告欄にはしばしばカメラのフィルムや印刷紙の宣伝ページがみられた。時代を反映して、雑誌記事の対象は国内にとどまらず、朝鮮や台湾、満洲などの外地や植民地にも及んだ。こうして雑誌『風景』にとりあげられた「風景」には、ナシヨナリズム、健康と厚生、旅行と余暇、科学と芸術など、さまざまな意味や価値が付与された。

今回の復刻版出版によって、雑誌『風景』は格段に閲覧しやすい資料となった。創刊号から昭和一八年一二月号の終刊に至る全一一冊を通覧し、「風景」に込められた意味と価値の解説に取り組み若い研究者が現れてくることを期待したい。

風景 六月號目次 第三卷 第六號 昭和十一年六月一日發行	
雲仙より天草を望む (表紙畫) 吉田 秋光	口 布哇風景 (ホタル川沿)……福原 信三 黒部川下廊下……冠 松次郎 繪 惠 那 峽……山田 應水 隠岐國賀海岸二景……(佛岩と通天橋)
朝鮮風景雜叢 ……藤島雅一路……2 日本北アルプスの特色……冠 松次郎……7 小笠原島の風景……本田 正次……10 高原の新緑美……黒田 鵬心……1 八ヶ岳 高原……爲 藤五郎……14 高原線・諏訪湖・霧ヶ峯 (第四回観勝旅行會目的地)……13	スケ 大町街道から諏訪へ……中 澤弘光……18 ツチ 桃 莊 關 春……高 木 長 葉……28 と文 千倉のスケッチ……小 寺 健 吉……31
薩南の火山島——硫黄島……田中 館 秀三……20 隠岐の新風景……脇水 鐵五郎……32 山村民家の屋根……山口 貞夫……26 風景と氣象……築地 宜雄……30	ニュース……37 協會記事……39 會員消息・新入會員……40 第四回観勝旅行會案内……41 前號要目……42 編輯後記……42

特集一覧

巻1号	特集名
1-3	伊豆半島
2-2	雪の風景
4	郷土風景
6	黒部峡谷
8	伊豆大島
3-5	沼津と修善寺
8	諏訪湖と霧ヶ峰
12	戸隠野尻旅行記念
4-1	松江と宍道湖
2	薩南
3	小豆島
4	琵琶湖
5	風景と広告
6	富士五湖
7	利根水郷
8	阿寒
9	十和田
10	浅間山と碓氷峠
11	東京都市風景
5-2	紀南
5	別府
7	那須旅行記念
8	佐渡
11	猪苗代湖と磐梯山
12	琵琶湖旅行記念
3	日向
4	大乗院趾庭園
7	奥伊豆
7	箱根

巻1号	特集名
9	式根島旅行会記念
10	松島
12	神津牧場・物見山・内山峡・浅間高原旅行会記念
7-1	大和地方
3	知多半島
6	房総半島
9	佐渡及新潟地方
11	聖地風景
8-1	台湾
4	防長地方
6	武蔵野風景、蘆花公園と深大寺
7	能登半島
8	奥日光
10	神戸
11	甲州
9-1	南鮮地方
2	大東亜共栄圏の風景点描
4	南支地方
7	噴火湾(内浦湾)地方
10	信越地方
12	画家の見たる南方の風景
10-1	百号記念、日本美と風景
2	「新日本八景」選後所感
4	阿蘇
6	志賀重昂先生記念
8	樺太
10	松尾芭蕉二百五十年忌記念
11	沖縄

正宗得三郎 詩の茶屋

簡明で古く武蔵の話を聞いて、一茶の本朝、不動明王、森の木乃、武蔵の修行した戸の雲霞寺、洞窟など見物し直いと想つてゐた其日は、是れらしい時辰なので若葉が緑に染み、見えるそれで我々同行は一茶の車に乗つた。本明寺に滑つた短距離の坂道は可なり急である、掘道つて見ると前本寺は下方に展開されて、水で金堂山の頂が見え出した。時を登りつめた時にその空気がある。この階段では黒石茶屋と稱してゐる。黒石が黒岩の敷きをしてゐる頃この茶屋はよく来てゐた。それで草花の中に咲いてゐるさんは、今ある茶屋の前の光景を語らぬ、黒石茶屋として茶屋の中を文章が十数行書かれてゐる。金堂山も茶屋の後にかすむ様な三角形をして居てゐる。

飛騨白川の別天地

飛騨の白川村は、昭和九年に、隠岐の観勝旅行会に、我が國で別天地を築くものがある。家庭に在りて、大衆、其内に風景を共に楽しむのである。

同上全景 (山田正彦氏)

第一の茶屋 大川白河邸

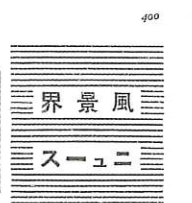
Table with columns for regions (地方, 北海道・東北, 関東, 中部, 近畿, 中国・四国, 九州・沖縄, その他) and a list of major landscape names.

風景美概論(一)



黒田 鶴心

風景美は、天と人工との交錯したものである。換言すれば、風景美は、天と地上の自然と人工の三要素から成立している。然るに普通「風景」としてのものは、人工美に属する範囲に在りて、自然(天)



東北地方 十和田公園の観光施設 十和田国立公園に隣接する観光施設として、十和田湖の湖畔に、内務省が、石井清一、石井柏亭、石川欽一郎、石川寅治、石黒敬七、伊東祐一、井下清、井深徹、内田巖、内田清之助、近江満子、大野隆徳、岡田紅陽、荻原井泉水、奥瀬英三、尾佐竹猛、加藤誠平、冠松次郎、岸衛、岸田日出刀、栗原信、黒田鶴心、国府厚東、小坂立夫

主要執筆者一覧

- List of authors and their names, including 相原寛太郎, 足立源一郎, 安倍能成, 石井柏亭, 石川欽一郎, 石川寅治, 石黒敬七, 伊東祐一, 井下清, 井深徹, 内田巖, 内田清之助, 近江満子, 大野隆徳, 岡田紅陽, 荻原井泉水, 奥瀬英三, 尾佐竹猛, 加藤誠平, 冠松次郎, 岸衛, 岸田日出刀, 栗原信, 黒田鶴心, 国府厚東, 小坂立夫, 田村剛, 為藤五郎, 辻永, 辻村太郎, 坪谷幸六, 坪谷水哉, 鶴田吾郎, 出口競, 徳川宗敬, 鳥山悌成, 中沢弘光, 中西利雄, 中村孝也, 中村直次郎, 成沢玲川, 西沢笛敏, 長谷川春子, 原田治郎, 日名子実三, 平井武雄, 平塚運一, 福原信三, 藤島玄治郎, 藤浪剛一, 本郷高德, 本田正次, 正宗得三郎, 真野紀太郎, 三浦伊八郎, 南薫造, 三宅克己, 向井潤吉, 武藤喜一郎, 村林忠, 望月春江, 森欽之助, 矢沢弦月, 安本江陽, 矢吹葉人, 山口蓬春, 山田応水, 山田醇, 山本久三郎, 山本洋一, 吉沢庄作, 吉田秋光, 吉村信吉, 脇水鉄五郎

日本風景と地質

日本風景と地質 脇水 鐵五郎 地質の異なる日本風景、地質学的な観点から風景の形成を説明する文章。



創刊に際し風景日本の躍進を望む

創刊に際し風景日本の躍進を望む 本多 静六 雑誌の創刊にあたっての挨拶文と展望。



日本風景と観光事業

日本風景と観光事業 高久 甚之助 観光事業の発展と風景の保護に関する議論。

風景協會設立趣意書

我が國は夙に世界の風景國として知られ、その秀麗なる國土の自然は、建國以來の光輝ある歴史と相俟つて、我國文化に特異なる色彩を賦與して居るのは頗る顯著なる事實である。國民の思想、文化、藝術等悉くその美はしい風景により影響せられざるはなく、而して又我國民ほど、風景を鍾愛する念の深きはないのである。

然るに現代人は動もすれば器械の文明に酔ひ、忽ちを極むる物質的生活に溺れ、我が天恵の厚きに馴れ、眞に風景を享有する心の餘裕を失はうとしてゐる。而して我が國に於ては、未だ風景の科學的研究の見るべきもの無く、日に月に産業其他功利的施設の爲に蠶食せられつゝある國土の風景に對してその保存擁護の運動の熾烈ならざるは、識者の最も憂慮する所である。況んや風景の保健教化等有ゆる方面への利用施設を合理的に講究せんとする者に至りては、殆んど稀である。と謂つてよい現狀である。

茲に於て科學と藝術との二大分野に跨りて、治く知識を糾合し、風景の綜合的研究調査を行ひ、更に進んではその保存利用の施設に關して鞏固なる基礎を築き、やがては風景國策の樹立を期せんこと、實に刻下の急務であると言はねばならぬ。これは獨り日本文化の搖籃たる風景を宣揚し遍く其の慈光に浴せしめ、日本文化をして固有の發展を遂げしむる爲に緊要なるのみならず、我が國土の風光に憧れて、來遊する外客に對しては、よくその惠澤を頒ち、以つて國際親善に資せしむると共に、一面國際貸借の改善に寄與する所以であると信ずる。吾人はこの重大なる文化的事業たるに稽へ廣く同志を日本全國に募り、風景協會を設立しその使命を達成せんことを期する次第である。

風景協會々則拔萃

- 第一條 本會ハ風景協會ト稱ス
第二條 本會ノ事務所ハ東京市ニ置キ之ヲ本部トシ必要ニ應ジ地方ニ支部ヲ置クコトヲ得
第三條 本會ハ風景ニ關スル研究調査ヲ爲シ併セテ其ノ保護利用ヲ圖ルヲ以テ目的トス
第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲メ左ノ事業ヲ行フ
一 風景ニ關スル一般研究調査
二 機關雜誌其ノ他圖書ノ刊行
三 研究会講演會及展覽會ノ開催
四 團體會員ノ依頼アルトキ風景地ノ調査計畫並ニ宣傳ニ關スル指導或ハ援助
五 各項ノ外本會ノ目的ヲ達成スルニ必要ナル事項

- 第五條 本會々員ヲ分チテ左ノ四種トス
一、名譽會員 二、正會員 三、賛助會員 四、團體會員
第六條 名譽會員ハ役員會ノ決議ヲ經テ會長ノ推薦シタル者
正會員ハ風景ニ關スル特殊ノ學識經驗ヲ有シ會費年額金參圓ヲ納ムル者ニシテ役員會ノ承認ヲ經タル者
賛助會員ハ本會ノ趣旨ニ賛成シ會費年額金拾圓以上又ハ一時金壹百圓以上ヲ納ムル者團體會員ハ本會ノ趣旨ヲ賛助シ會費年額金貳拾圓以上ヲ納ムル者ニシテ役員會ノ承認ヲ經タル者

- 第七條 本會々員タラントスル者ハ住所姓名職業(團體會員ニ在リテハ其ノ名稱、事務所所在地及代表者姓名)會員種別ヲ記載シ本會ニ申込ムヘシ

- 第八條 會員ハ機關雜誌其ノ他ノ印刷物(團體會員ニハ五部以上)ノ配布ヲ受ケ本會開催ノ會ニ出席スルコトヲ得
第十三條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一 會長 一名
二 副會長 三名以内
三 理事 三十名以内 (内常務理事五名)
第二十五條 本會ノ事業年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

- 會長 公爵 鷹司 信輔
副會長 工學博士 塚本 靖
林學博士 本多 靜六
理學博士 三好 學
理事 醫學博士 藤波 剛一
理學博士 本田 正次
常務理事 工學博士 岸田日出刀
高久甚之助
築地 宜雄
中村 孝也
福原 信三
文學博士 田村 剛
辻村 太郎

東京市目黒區上目黒三、一七三二
鷹司公爵邸内
風景協會
振替東京五〇八五八番

国立公園協會 発行 [昭和4年、昭和19年刊]

国立公園 全12巻・別冊1

- 別冊II解説(白幡洋三郎)・総目次・索引
体裁II B5判・上製・総5、568頁
推薦II 小泉武栄・越澤明・曾山毅・西田正憲
価格II 本体312、000円十税



本書は、本多静六、田村剛、三好学、細川護立などにより昭和二年に設立された国立公園協會の機関誌である。昭和四年に創刊、太平洋戦争中の昭和一八年に『國土と健民』と改題されるが、戦後の昭和二三年『国立公園』の名で復刊し、今日まで刊行が続いている。国立公園法(昭和六年)制度の解説、同九年から指定が始まった国立公園の特質、保護や利用等の記事を通して国立公園の普及啓蒙に努めた。戦前戦中期、植民地をも含む国立公園の成立・運営とその意義、国立公園行政の全体像を捉える基本資料である。

遍路同行会 発行 [昭和6年、昭和17年刊]

遍路 全3巻・別冊1

- 別冊II解説(下西忠)・総目次・索引
体裁II A5判・上製・総1、238頁
推薦II 真鍋俊照・森正人
価格II 本体54、000円十税



本誌は東京中野・宝仙寺内の遍路同行会機関誌である。そして、「遍路愛」を鼓吹するために設立された遍路同行会の目的を達成するための「文書宣伝」を具体化したものである。誌面では会長の富田敦純の文章をはじめ、高群逸枝や萩原井泉水等の著名文化人や会員の四国遍路の便りも載っている。また、遍路同行会は「大東京遍路修行会」「多磨遍路」等、関東圏での遍路行事も行った。近代の遍路を知るために不可欠な貴重資料である。

史蹟名勝天然紀念物保存協會 発行 [大正3年、大正12、15年、昭和19年刊]

史蹟名勝天然紀念物 全55巻・附録1・別冊2

- 別冊II「大正編」解説(丸山宏)・総目次・索引
[昭和編I期] 本体200、000円十税
[昭和編II期] 本体200、000円十税
[昭和編III期] 本体200、000円十税
[昭和編IV期] 本体280、000円十税
価格II「大正編」本体68、000円十税
体裁II A4判、A5判・上製・総23、392頁
推薦II 荒山正彦・上田正昭・栄原水遠男・羽賀祥二

本誌は、旧幕臣の侯爵徳川頼倫らが一九一一年に発足させた、史蹟名勝天然紀念物保存協會の会報である。その趣旨及び内容は、日露戦争後、国内産業の發展の裏で進む、文化的景觀と記念物文化財破壊の危機を訴え、保存の啓蒙と法制化を目的とし、様々な分野から著名な学者が参加し、多岐にわたる見解・分析を寄稿している。大正期から昭和戦前期までの文化財保護行政の足跡を辿り、その全貌を明らかにするものである。

帝国古蹟取調會 発行 [明治33年、明治37年刊]

古蹟 全3巻・別冊1

- 別冊II解説(丸山宏)・総目次・索引
体裁II A5判・上製・総1、536頁
推薦II 羽賀祥二
価格II 本体55、000円十税



明治期の産業發展の過程で土地開發が進み、文化遺産は破壊の危機に晒される。九条道孝らは一九〇〇年、文化遺産の保存顕彰を目的として帝国古蹟取調會を發足させ、喜田貞吉を編集主任として機関誌『帝国古蹟取調會會報』を創刊、一九〇三年『古蹟』と改題する。わずか四年後には活動を停止するが、誌面には吉田東伍、小杉樞郎、三宅米吉ら代表的歴史学者・考古学者が寄稿し、個別の史蹟研究、地方の紹介、古代石碑の論稿も多い。

復刻版

風景

全12巻・別冊1

「復刻版概要」

- 体 裁 Ⅱ B5判 / 上製 / 総5、494頁
- 別 冊 Ⅱ 総目次・索引

*別冊のみ分売可 Ⅱ 本体2、000円+税
ISBN 978-4-8350-8227-1

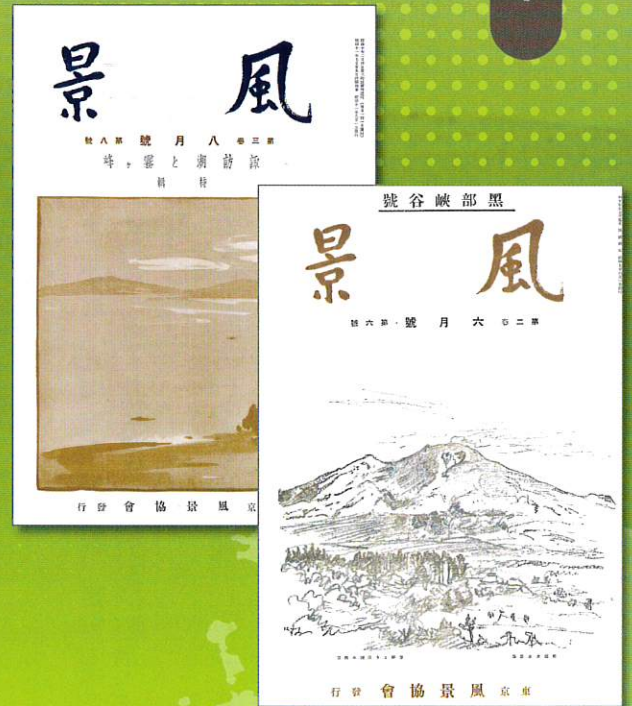
- 推 薦 Ⅱ 荒山正彦 (関西学院大学教授)

- 揃定価 Ⅱ 本体288,000円+税

- 配本一覧

第4回配本			第3回配本			第2回配本			第1回配本			配本	
第12巻	第11巻	第10巻	第9巻	第8巻	第7巻	第6巻	第5巻	第4巻	別冊 (総目次・索引)	第3巻	第2巻	第1巻	復刻版巻数
10巻1号〜12号	9巻4号〜12号	8巻8号〜9巻3号	7巻12号〜8巻7号	7巻3号〜11号	6巻6号〜7巻2号	5巻9号〜6巻5号	4巻12号〜5巻8号	4巻3号〜11号		3巻6号〜4巻2号	2巻9号〜3巻5号	1巻1号〜2巻8号	原本巻数
昭和18年1月〜12月	昭和17年4月〜12月	昭和16年8月〜17年3月	昭和15年12月〜16年7月	昭和15年3月〜11月	昭和14年6月〜15年2月	昭和13年9月〜14年5月	昭和12年12月〜13年8月	昭和12年3月〜11月		昭和11年6月〜12年2月	昭和10年9月〜11年5月	昭和9年10月〜10年8月	原本発行年月
2019年5月	2019年1月	2019年1月	2018年9月	2018年5月	2018年5月	2018年5月	2018年5月	2018年5月	配本年月	2018年5月	2018年5月	2018年5月	配本年月
72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	本体価格	72,000円+税	72,000円+税	72,000円+税	本体価格
8350-8223-3	8350-8219-6	8350-8215-8	8350-8210-3										

※ 価格下の数字は ISBN を示し、頭に「978-4」が付きます。



- 表示価格はすべて税別

不二出版

〒112-0005

東京都文京区水道2-10-10

電話 03-5981-6704

ファクシミリ 03-5981-6705

振替 00160-2-94084